

田辺福麻呂の「八島国」

——万葉歌を作ること——

渡部亮一

はじめに

万葉歌はなぜ作られたのか。五七音の連続、特殊な用語（大君や大宮人）など、極めて限定された一形式にこだわるのはなぜだろうか。

そのような問題意識から、天平の歌作者田辺福麻呂を取り上げる。従来福麻呂は、ありがちな歌表現、模倣・没個性の歌作者として評価が低かった。しかしこの十年ほどの間に再評価が始まっている^①。彼が生きた天平年間は、聖武天皇による久邇京遷都や大仏開眼など、新しい宮廷世界が成立する地点である^②。その宮廷世界と万葉歌の交渉については、大伴家持を中心に議論されているが、福麻呂歌も同様に分析される必要がある。

拙稿「久邇「新京」の誕生^③」では、久邇京とは中国的専制君主としての聖武の元に作られた「新京」であり、福麻呂歌の「新世」久邇京・「古京」奈良には、いわばそれまでと断絶した「新京」

が官人に与えた衝撃を読み取るべきと論じた。

本稿では、その際課題として残された、福麻呂歌が描く世界の検討を行う。それは必然的に、なぜ歌を作るのかを問うことにならざるだろう。

一、久邇京世界と「八十伴男」

① 寧楽の故りにし郷を悲しびて作れる歌一首（并せて短歌）

やすみしし わご大君の 高敷かす 日本の国は 皇祖の
神の御代より 敷きませる 国にしあれば 生れまさむ 御
子のつぎつぎ 天の下 知らしまさむと 八百万 千年をか
ねて 定めけむ 平城の京師は かぎろひの 春にしなれば
春日山 三笠の野辺に 桜花 木の晚隠り 貌鳥は 間なく
数鳴く 露霜の 秋さり来れば 射駒山 飛火が魄に 萩の
枝を しがらみ散らし さ男鹿は 妻呼び響む 山見れば
山も見が欲し 里見れば 里も住みよし もののふの 八十

伴の男の　うち延へて　思へりしくは　天地の　寄りあひの
限　万代に　榮え行かむと　思へりし　大宮すらを　恃めり
し　奈良の都を　新世の　事にしあれば　大君の　引のまに
まに　春花の　うつろひ易り　群鳥の　朝立ちゆけば　さす
竹の　大宮人の　踏み平し　通ひし道は　馬も行かず　人も
往かねば　荒れにけるかも
反歌二首

立ちかはり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり
なつきにし奈良の都の荒れゆけば出で立つことに嘆きしまさる

(一〇四七〜九)

②春の日に、三香の原の荒れたる墟を悲しび傷みて作れる歌一
首（并せて短歌）

三香の原　久邇の都は　山高く　川の瀬清し　住みよしと
人は言へども　在りよしと　われは思へど　古りにし　里に
しあれば　国見れど　人も通はず　里見れば　家も荒れたり
愛しけやし　かくありけるか　三諸つく　鹿背山の際に　咲
く花の　色めづらしく　百鳥の　声なつかしき　在りが欲し
住みよき里の　荒るらく惜しも

反歌二首

三香の原久邇の京は荒れにけり大宮人の移ろひぬれば
咲く花の色はかはらずももしきの大宮人ぞ立ち易りける

(一〇五九〜六一)

福麻呂歌集には、「大宮人」「八十伴男」といった人物が多く登場する。彼らは従駕歌などに多く登場した者たちであり、森朝男氏は、宮廷世界の外縁部を形成する存在と指摘する。つまり、「大宮人」という景が、描けない中心——大君——を含む世界を、外側から示すことになる。

もちろん福麻呂歌においても、彼らは「大君」との関係において登場する。ただし、三香原荒墟歌に見える「人」の存在が注意される。「われ」と対であるこの「人」は、反歌において「大宮人」とある者と等しく考えて良いだろう。つまり、不特定の人物呼称である「大宮人」たちは、福麻呂自身をも含む一群として理解出来るのではなからうか。

だが、それは歌作者としての「われ」を、結果として「大宮人」の中に埋没させることでもある。「われ」と「人」を対にする歌は『万葉集』中でも珍しい。景としての「大宮人」に対し、それを見る「われ」ははっきり区別される場合が多い。福麻呂歌集における歌い手は、その意味で万葉歌一般に還元できない面を抱えている。

さて、①の「八十伴男」は、『万葉集』中の用例が福麻呂や家持の頃に集中しており注目されるが、「うち延へて思へりしくは」とあり、「大宮人」「人」など同質の表現がある一方で確実な「われ」がないことから、これも福麻呂自身を含む表現と思われる。

③……天皇が朝廷に仕へまつる、領巾掛くる伴の男、襷掛くる伴の男・鞆負ふ伴の男・劔佩く伴の男、伴の男の八十伴の男

を始めて……。

(祝詞「六月晦大祓」)

『古事記』には、天孫降臨に従う「五伴緒」が登場する。彼らはいずれも氏族の祖神であり、この「伴緒」は当然「氏」を抱えている。一方、大祓祝詞では「領巾挂くる伴の男」ら職能集団を挙げた後、その総称として「伴の男の八十伴の男」と呼ぶ。「八十伴男」が抽象的表現であることは明らかだが、祝詞の文脈にある限り、「氏」を離れた表現とまでは言えない。

④ 近江の海 泊八十あり 八十島の 島の崎崎……(三三三九)

⑤ ……隄国の 泊瀬の川に 舟浮けて わが行く河の 川隈の 八十隈おちず 万度かへり見しつ…… (七九)

⑥ ……沖つ鳥 味経の原に もののふの 八十伴の緒は 廬りして 都なしたり 旅にはあれども (九二八・笠金村)

一方万葉歌において、「八十」の付く表現は幾つか見える。「八十島」「八十隈」など、いずれも島や隈のすべてを均質に捉える表現と理解される。万葉の「八十伴男」も同様とすれば、祝詞以上に抽象化された可能性がある。

実際、⑥の金村・①の福麻呂とも、そこにあるのは「大君」に仕える者という、極めて抽象的な存在である。つまり、奈良宮廷

における身分・職掌とは切り離された形で、抽象的な仕える者が歌われ、しかも福麻呂は自身をその中に加える。当然描かれた世界も、書紀・続紀とは異なるものとなる⁶⁾。ところが、同時期家持は「八十伴男」に新たな限定を与えている。

⑦ 葦原の 瑞穂の国を 天降り 領らしめしける 皇御祖の 神の命の 御代重ね 天の日嗣と 領らし来る 君の御代御代 敷きませる 四方の国には……(略) ……朕が御代に 顕はしてあれば 食国は 栄えむものと 神ながら 思ほしめして 物部の 八十伴の緒を 服従の 向けのまにまに 老人も 女童児も 其が願ふ 心足ひに 撫で給ひ 治め給へば 此をしも あやに貴み 嬉しけく いやよ思ひて 大伴の 遠つ神祖の その名をば 大来目主と 負ひ持ちて 仕へし 官 海行かば 水浸く屍 山行かば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なぬ 顧みは せじと言立て 大夫の 清きその名を 古よ 今の現に 流さへる 祖の子等ぞ 大伴と 佐伯の氏は 人の祖の 立つる言立て 人の子は 祖の名絶たず 大君に 奉仕ふものと 言ひ継げる 言の官ぞ…… (四〇九四・家持・賀陸奥國出金詔書歌)

⑧ 吉野の離宮に 幸行さむ時の為に、儲けて作れる歌一首并せて 短歌

高御座 天の日嗣と 天の下 知らしめしける 皇祖の 神

の命の 畏くも 始め給ひて 貴くも 定め給へる み吉野
の この大宮に あり通ひ 見し給ふらし 物部の 八十伴
の 緒も 己が負へる 己が名負ふ負ふ 大君の 任の任く任
く この川の 絶ゆることなく この山の いやつぎつぎに
かくしこそ 仕へ奉らめ いや遠水に

反歌

古を思ほすらしもわご大君吉野の宮をあり通ひ見す

物部の八十氏人も吉野川絶ゆることなく仕へつ見む

(四〇九八〜四一〇〇)

家持は、福麻呂以上にはつきり自らを「八十伴男」に位置付けている。それは「大君」との絶対的主従関係に基づきその先兵となる、「氏」であった。⑨反歌に、より「氏」を前面に押し出した「八十氏人」があることはそれを証している。

さらに家持は、「八十伴男」を具体化していく。「越中国の守の館にして」といった作歌事情を記すことは、仕える者と奈良宮廷の職掌・身分が切り離せないことを意味しよう。また「大久米主」といった祖は、著しく仕える者の範囲を狭めている。

ただし、どれだけ具体化を重ねたとしても、天平の律令による身分制と、家持の歌世界が等しくなることはない。「八十伴男」を越中守と、「大君」を聖武天皇と融合させることも、あくまで家持にとっての新たな宮廷世界を構築する過程であつたはずだ。

つまり、内実は大きく異なるものの、福麻呂と家持は、いずれ

も歌を作る中で新たな宮廷世界を構築していた。それは、やはり久邇京遷都が契機ではなからうか。前記拙稿⁽⁸⁾で論じたように、久邇(恭仁)京は『続日本紀』に「始めて京都を造る」とされる。「皇帝」聖武による「新京」は他の宮都とは大きく異なっていた。それが統紀編纂時点における歴史認識に留まらないことは、讚都歌の存在、さらに次の表現などから推測される。

⑨今知らす久邇の京に妹に逢はず久しくなりぬ行きてはや見な

(七六八・家持)

⑩今造る久邇の都は山川の清けき見ればうべ知らすらし

(一〇三七・家持)

⑪今造る久邇の京に秋の夜の長きに独り寝るが苦しき

(二六三一・家持)

家持は久邇京に対してのみ「今造る」「今知らす」という表現を用いている。久邇京と言う「今」が、奈良との断絶を含むことを読み取れよう。

⑫縣けまくも あやにかしこし 言はまくも ゆゆしきかも

わご王 皇子の命 万代に 食したまはまし 大日本 久邇

の京は…… (四七五・家持・安積皇子挽歌)

⑬懸けまくも あやにかしこし わご王 皇子の命 もののふ
の 八十伴の男を 召し集へ 率ひ賜ひ 朝胤に 鹿猪ふみ
起し 暮胤に 鶉雉ふみ立て 大御馬の 口抑へ駐め 御心
を見し明らめし 活道山 木立の繁に 咲く花も 移ろひ
にけり 世中は かくのみならし 大夫の 心振り起し 劍
刀 腰に取り佩き 梓弓 鞞取り負ひて 天地と いや遠長
に 万代に かくしもがもと 憑めりし 皇子の御門の 五
月蠅なす 騒く舍人は 白袴に 服取り着て 常なりし 咲
ひ振舞ひ いや日異に 変らふ見れば 悲しきろかも

(四七八・大伴家持・安積皇子挽歌)

⑭大伴の名に負ふ鞞帯びて万代に憑みし心何処か寄せむ

(四八〇・同反歌)

安積皇子挽歌は、事実上の久邇京讃歌となつている。家持が「八十伴男」を登場させた例として、恐らく最も古いこの歌が久邇京に関わることは偶然だろうか。

歌中、彼らは永遠の都久邇京に仕えるべき人々として描かれる。歌中「大日本久邇京」という呼称が用いられるが、これは『続日本紀』に、

⑮十一月戊辰、右大臣橘宿禰諸兄奏さく、「此間の朝廷、何なる名号を以てか万代に伝へむ」とまうす。天皇、勅して曰は

く、「号けて、大養徳恭仁大宮とす」とのたまふ。

(『続日本紀』天平十三年十一月二十一日)

と記される名付けに従つたものと考えられ、久邇京が「新京」であることととりわけ強く意識したものであることは明らかだ。そして、⑭と合わせれば、この「八十伴男」も大伴氏という「氏」を負う。家持は久邇京遷都に先立つ関東行幸にも参加し、歌を作つているが、そこに「氏」の意識は見えない。家持の氏族意識・「八十伴男」自体が、「新京」誕生に伴つて生まれた新たな問題ではなかつたか。

一方の福麻呂は、明確に久邇京を中心とする世界の中で彼らを迎場させた。しかも、寧楽故郷歌く三香原荒墟歌のみならず、歌集歌全般が同様の世界を描こうとしていたと考えられる。すなわち、敏馬浦歌にみえる「八島国」がそれである。

次章ではこの、福麻呂が作り出そうとした世界の内実に迫りたい。

二、「八島国」の内実——人々の発見

⑯敏馬の浦を過ぎし時に作れる歌一首（并せて短歌）

八千棹の 神の御世より 百船の 泊つる泊と 八島国 百
船人の 定めてし 敏馬の浦は 朝風に 浦波騒ぎ 夕波に
玉藻は来寄る 白沙 清き浜辺は 往き還り 見れども飽かず
うべしこそ 見る人ごとに 語り継ぎ 思ひけらしき 百世

歴て 思はえゆかむ 清き白浜

反歌二首

まそ鏡敏馬の浦は百船の過ぎて行くべき浜にあらなくに
浜清く浦うるはしみ神代より千船の集ふ大わたの浜

(一〇六五〜七)

①現つ神 わご大君の 天の下 八島の中に 国はしも 多にあら
れども 里はしも 多にあれども 山並の 宜しき国と 川
次の たち合ふ郷と 山城の 鹿背山の際に 宮柱 太敷き
奉り 高知らず 布当の宮は……(讀久邇新京歌・一〇五〇)

福麻呂歌集において「八島国」という呼び名は一度だけであり、どこまでこの呼び名を普遍化できるかには問題が残る。ただ、久邇京讚歌に「八島の中に」とあることを合わせれば、少なくとも福麻呂が描こうとする世界が、「八島」で成り立つとの認識はあったものと思われる。

この「八島国」という呼び名は、そもそもどのように使われていたのか。上代において、はっきりとこの名が登場するのは『古事記』においてである。

⑱故、此の八つの島を先づ生めるに因りて、大八島国と謂ふ。

『古事記』

⑲八千矛の 神の命は 八島国 妻娶きかねて 遠々し 高志

の国に 賢し女を 有りと聞かして 麗し女を 有りと聞かして……
『古事記』

記を読めば、「大八島(洲)」という呼称を、万葉の歌作者が知らなかったとは考えにくい。天皇統治の世界に対する呼称として、「八島国」が特異なものだったとは言えまいが、福麻呂の歌うそれは、神語と同じく八千神のいる世界であり、そういう限定された文脈にあった可能性がある。

ならば神語の世界観を福麻呂が借用したかと言えば、そこにも問題がある。神語には、「八島国」を探した上で高志国へとある。「大八島国」は高志国をも含む国土の総称であるが、この「八島国」は他方にある国を突出させている。

一方、福麻呂の「八島国」にそのような突出は見られない。国土は地域性を持たずに均質化されている。それを象徴するものが「人」であろう。前章で述べたように、福麻呂歌集には「八十伴男」「大宮人」ら、同時代の人々が多く登場する。そして、過去の人々の姿も見える。「見る人」「この道を行く人」などである。この「見る人」は、福麻呂歌以外にも散見される。

⑳風莫の浜の白波いたづらに此処に寄せ来る見る人無しに

(一は云はく、ここに寄せ来も) (二六七三)

㉑霜枯れの冬の柳は見る人の纏にすべく萌えにけるかも

(二八四六)

② 桜花時は過ぎねど見る人の恋の盛りと今し散るらむ

(二八五五)

これらは相聞(挽歌的でもある)の相手を寓意するものである。福麻呂歌のように、自らにつながる過去の存在というわけではない。

③ ……古ゆ 今の現に かくしこそ 見る人ごとくに 懸けて偲はめ (三九八五・家持・二上山賦)

④ 落ち激つ片貝川の絶えぬ如今見る人も止まず通はむ

(四〇〇五・敬和立山賦・池主)

⑤ ……仕へ来る 祖の官と 言立てて 授け給へる 子孫のいや継ぎ継ぎに 見る人の 語り継ぎてて 聞く人の 鏡にせむを あたらしき 清きその名そ おぼろかに 心思ひて虚言も 祖の名絶つな 大伴の 氏と名に負へる 大夫の伴 (四四六五・家持・喩族歌)

しかし、家持・池主の例では、自らと同じく「見」た過去の存在として「見る人」が登場する。⑤から考えるなら、それは過去

の「八十伴男」たちとも読める。新しい「見る人」が、この頃に浮上していたのは間違いない。

さて、「見る人」について詳細を検討すると、改めて彼らが現在の「八十伴男」たち、あるいは福麻呂自身にとつての過去を指す点、そして「見」「聞」「語」といった行為を同じく行つた点が注目される。

都などを訪れ、「見」て作る歌としては、従駕歌のそれが知られている。

⑥ 養老七年癸亥の夏五月、吉野の離宮に幸しし時に、笠朝臣金村の作れる歌一首(并せて短歌)

滝の上の 御舟の山に 瑞枝さし 繁に生ひたる 梅の樹の
いやつぎつぎに 万代に かくし知らさむ み吉野の 蜻蛉
の宮は 神柄か 貴くあらむ 国柄か 見が欲しからむ 山
川を 清み清けみ うべし神代ゆ 定めけらしも

反歌二首

毎年にかくも見てしかみ吉野の清き河内の激つ白波

山高み白木綿花に落ち激つ滝の河内は見れど飽かぬかも

(九〇七、九)

典型的な従駕歌であるこの歌は、歌作者金村が「見」た景が歌われ、「うべし」という形で、それが神代以来のものであると示される。この「うべし」は、福麻呂⑥にもあり、それは同じく、

ある景を歌う文脈にある表現である。いずれも、自らの「見」の技術を保証する表現と捉えることが出来る。

ただし、金村が神代へと自らの「見」を遡行させるのに対し、福麻呂が遡行させる先は「見る人」である。この違いはどう考えるべきだろうか。

⑦葦屋処女の墓を過ぎし時に作れる歌一首（并せて短歌）

古の　ますら壮士の　相競ひ　妻問しけむ　葦屋の　うなひ
処女の　奥津城を　わが立ち見れば　永き世の　語りにしつ
つ　後人の　思ひにせむと　玉梓の　道の辺近く　磐構へ　作
れる塚を　天雲の　そくへの限り　この道を　行く人ごと
に行き寄りて　い立ち嘆かひ　ある人は　哭にも泣きつつ　語
り継ぎ　思ひ継ぎくる　処女らが　奥津城どころ　われさへ
に　見れば悲しも　古思へば

反歌

古の小竹田壮子の妻問ひしうなひ処女の奥津城ぞこれ
語りつくからにも幾許だ恋しきを直目に見けむ古壮士

(二八〇一〜三)

⑧……海石の　潮干の共　浦洲には　千鳥妻呼び　葭辺には　鶴
鳴きとよむ　見る人の　語りにすれば　聞く人の　見まく欲
りする　御食向ふ　味原の宮は　見れど飽かぬかも

(二〇六一・難波宮作歌)

⑦も、墓を「見」て「語り継ぐ」者が登場する。そして、自らの「見」がそれら過去の存在とつながる点も同様である。⑧も含め、福麻呂歌集歌における景表現は、そもそも「見る人」のものとして歌われ、福麻呂は彼らの列に連なっているにすぎない。それは、福麻呂にとって「見る人」を発見することこそが目的であり、「八島国」を知る手だてだったことを示してはいないか。

しかし、歌集中「見る人」を特定できる表現はない。「八十伴男」らが固有性を失った仕える者であったように、過去の「見る人」にも何ら固有性がない。一方、敏馬浦には「八千梓神の御世」、過葦屋処女墓歌には「直目に見けむ古壮士」といった形で特定の存在が登場する。敏馬浦歌の「見」は八千梓神に遡行しないが、「直目に見」る者も、福麻呂らとは明確に連う「見」を経験する。いずれも景の起源に関わる存在である。

つまり、抽象的「見」る者の歴史の末尾に自らを加えることは、一方でたどり着けない起源を作る営みであったと言える。それは、荒都歌の「八十伴男」「大官人」にとつて、廢都・遷都の起源「大君」がたどり着けない存在であったことと符合する。

こうしたたどり着けない「果て」の発見は、「八島国」の輪郭を浮かび上がらせる。しかもそれは、万葉歌の表現なしには有り得ない探究である。少なくとも福麻呂が歌を作ることには、他の表現媒体では代替出来ない意味があったと言える。

おわりに

さて、福麻呂歌集に登場する人物を追いながら、彼にとつての世界である「八島国」の問題、そして歌を作ることの意味などを考えてみた。ただし、本稿には一つ大きな課題が残っている。

すなわち、讚久邇新京歌である。そこは今造られた宮であり、過去を持たない。そしてこの歌には「八十伴男」も登場しない。従つてここで福麻呂は、直接「大君」を知る必要に迫られている。音に関わる表現を連ね、「聞」く同歌には、「見」とは違ふ技術が駆使されているが、紙数も尽きており、次稿を期したい。

また、「見る人」たちが、まさしく前代の〈宮廷歌人〉金村らと重なることにも気付かされよう。もちろん〈宮廷歌人〉という用語は、近代の研究者による便宜的概念に過ぎないが、福麻呂は「見る人」探究の中で、人麻呂・金村らをそうした身分として発見していたのかも知れない。この点も今後の課題としておく。

※『万葉集』は講談社文庫、『続日本紀』は岩波新大系、『古事記』は小学館新全集、『風土記』・『延喜式祝詞』は岩波旧大系から引用。

注

(1) 橋本達雄「田辺福麻呂——橋諸兄との関連——」(『万葉宮廷歌人の研究』一九七五)など、宮廷歌人論の一部として論じら

れることが多かった。しかし最近の『セミナー万葉の歌人と作品 第六巻 笠金村・車持千年・田辺福麻呂』(神野志隆光・坂本信幸編 二〇〇〇)では、天平の歌人としてその独自性を指摘する方向となっている。

(2) 聖武の宮廷については猪股ときわ『歌の王と風流の宮』(二〇〇〇)所収諸論を参照。後に述べる家持に関しても、万葉歌と天平宮廷を「反映」ではなく、別個に構築される世界と捉えている点など、多大な示唆を受けた。

(3) 「久邇「新京」の誕生——田辺福麻呂論へ向けて——」(『古代文学』三八 一九九九)。本稿の前提となる論であり、併読をお願いしたい。

(4) 森朝男「景としての大宮人」(『古代和歌と祝祭』一九八八)。なお同論において、中心が歌を離れ天皇とされることへの批判は、拙稿(3)に述べた。

(5) 「大殿祭」祝詞にも「領巾懸くる伴の緒」などある。また『常陸国風土記』香島郡には、「八十の伴緒」を「大八島国」の存在とする箇所があり、注目される。

(6) 仕える者—大君の二極化そのものは、特異ではない。例えば『風土記』では陪臣・陪従・侍従といった、天皇に付き従う者が現れるが、これも仕える者—天皇という軸で書かれている。この陪臣が戦のみならず、井戸を掘る(『播磨国風土記』小目野)等さまざまな技術を駆使する点は、「見」る歌作者との近さを感じさせる。

(7) 家持の「八十伴男」については、市瀬雅之「家持の氏族意識」
『大伴家持論——文学と氏族伝統——』(一九九七)などが参
考となる。

(8) 注(3) 拙稿。

(9) 仲瀬志保美「天平十四年正月十六日の宴が現す世界——聖武
天皇と恭仁京——」(『古代文学』三八 一九九九)は、聖武が
新たな天皇として久邇京遷都を行った点を論じるもので、参考
になる。また注(2) 猪股氏の諸論、特に「神女降臨」「天皇
の行幸・歌の行幸——宮廷歌人論のために」は、聖武の側から
その理念を論じたものとして重要。

(10) 他に一八六三・一八六七・三六二八などがあるが、いずれも
同様。

(11) 久邇京遷都後に從駕が行われたかも疑問があり、注(1) 楠
本論を含め、福麻呂を「宮廷歌人」と呼ぶことは常に議論があ
った。

※本稿は立命館大学日本文学会大会(二〇〇一・六)での報告を元
にした。貴重な御意見を頂いたことに感謝する。また、古代文学会
夏季セミナー(一九九九・八)で一部を報告し、その際にも多くの
示唆を受けた。

(わたなべ・りょういち 本学卒業生)